

---

# 食後に三錠、おみずでどうぞ。

森かえで

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

食後に三錠、おみずでどうぞ。

### 【Nコード】

N9167A

### 【作者名】

森かえで

### 【あらすじ】

もうここにはいらなかった。学校を出た。一直線に川沿いの道を目指した。ラーメンを食べたあとは、ゆっくり散歩をした。ねえ、薬。どうぞ、しろう。

## (前書き)

感想や至らない部分の指摘を頂ければ嬉しいです。

なお、文章にでてくる病気やその症状などは、すべて作者の創作です。ご理解お願いします。

コップの中に、一口分だけ水を残す。  
どっ、しよっ。

ばしゃあっ。

甲高い笑い声とともに、水が落ちてきた。黙っていると、二回目、三回目。ドアの向こうから、バケツの縁がちらりと見える。

銀色の、ここの床ふき用のぞうきんをいれてるバケツだった。声を出そうとすると、ちょうど第四弾が投入された。

口の中にじわりと広がる、金属特有の錆びた味。じゃああああ、水道の音が、さっきからずっと聞こえている。

「ちよつと、あんたたち」

一瞬あつち側で身動きが止まったようだった。水の音も止まった。しいっ。音をたてないように誰かが制している。

ドアを隔て、両側のしばしの沈黙の後に、五弾目がやってきた。

また大きな笑い声が聞こえたけど、もっと大きな音で予鈴が鳴り響いた。あいつらは足音とともに遠ざかっていった。

ドアは、しばらく開けようと頑張ったら突然開いた。勢いがついて体ごと投げ出される。そして、脱いだままひざで止まっていたパントツに両足をからめてしまい思い切り転んだ。

足がふらつくけど、なんとかパントツを穿く。鏡。鏡が映す私。髪が、制服が、青白い肌にはりついている。

ふっ、と力が抜けて、再び冷たいタイルの上に倒れ込んだ。

机に落書き、ノートに落書き、へのへのもへじに馬鹿・阿呆・死ね。体操服が隠されて、靴の紐はどこかにいった。

ああ、幼稚だなあ、ちゃちいよな。あいつら、セーラー服着た猿みたいだ。

大丈夫、あんなのだったら耐えられる。けど。

落書きは鉛筆のから油性ペンのものに進化、体操服は切り刻まれ、靴の中には絵の具が山盛り。ぶにゅー！！

でも、それでも、耐えられた、のに。

よりによってトイレで、ぞうきんのバケツで、水をかけるなんて。じわじわじわじわ、涙腺が緩んでった。

髪の中を、風が通り抜けていった。髪がさらさらなびくようになつた。ラーメン屋の中にもつた熱が効いたのかもしれない。

川沿いの小さな道。くねくね曲がる。鴨が二匹泳いでる。魚はもつと泳いでる。ゆっくり、ゆっくり歩いた。

ねえ。どうしよう。

左手の中には錠剤が三つあった。むきだしの白い錠剤、手ににじむ汗が染みていく。

むすむすと熱く圧縮した空気が漂う中で、私の顔は青白く、目は真っ赤に濡れていた。ラーメンを食べ終えたあとは、どこか一点をぼんやりと見つめ、お冷やをちよびちよび飲んでいたと思う。そんな私が小さな瓶から錠剤をとりだしたものだから、厨房にいたおじちゃんがあわてて私のところへ飛んできた。あ、んーと、なんて言いながら小瓶と私の顔とを交互に見ている。

「あー… あの」

「ハイ」

「普通、の、薬ですから」

「え、ほんとですか？」

「はい」

「ほんとですね？」

「はい」

おじちゃんと目が合った。まなざしはあったかかった。

「お冷や、つぎましようか」

「いえ、大丈夫です」

八の字に垂れた眉、小さく丸い鼻。優しそうな顔だな、と、思った。

「ちよつと、免疫の病気なんです、よね」

「え、じゃあ、持病なんですか」

「はい」

「ええ… そうなんですか」

「あ、勘定お願いします」

おじちゃんが、お冷やのコップを見た。一口分残した水。

「飲まなくて、いいんですか」

「はい」

笑顔で答えた。おじちゃんも笑顔を返して、お金を五十円まけてくれた。

毎食後の三錠。これが私の命を支えている。

副作用がある。手先がむくむ。体中に吹き出物ができる。髪がたくさん抜ける。ときどき眠くてたまらなくなる。

もつとひどいもの、薬のせいではない、副作用。クラスのみんなが怯えた目を向けるようになる。どんなに優しい人でも、ありのままの私を受け止めてくれなくなる。それに、数々の嫌がらせ。

我慢してきた。辛いのは、悲しいのは、私だけじゃない、みんな頑張つて生きている。みんなそれぞれいいところ悪いところがあつて、私はちよつとだけ、健康運が悪いだけなのだ。だけ。

今日は全体運が悪かつたかな。

川沿いの道をゆつくり歩く。柔らかい風、さらさらと草の音。薄汚れたガードレール。そこから身を乗り出して、おじいさんが釣りをしてる。

遠く、声が聞こえる。きゃはきゃはと笑う声。愚痴。もつと近く

に迫ってくる。私の思い出に、重なっていく。

あああ、新学期からトイレ掃除なんて最悪だよねえ。あ、なまえ、なんていうの。そう、いいなあ可愛い名前だえ。よし、じゃあこれから一緒に弁当食べよう。トイレ掃除同士、きやははー!!

「あの、ね、実は私……病気持ってた、らしくて」「……は？」

ばしゃあつ。

魚が跳ねた。水が跳ねた。

あ、ああ。あ。

私は声を押さえられなかった。

ねえ、どうしよう、どうしよう。

このままでしか、生きていけない。

もう、みんなの瞳は、先入観のない心は。

私を追いやる水の流れは。

薬なんて、飲んだって。

ああ。おじいさんの脇で、川に錠剤を放り投げた。ぽちゃ、ぽちゃんと音が聞こえた。最後の一粒は汗で手にくっついていて、右手でつまんで落とした。ぽちゃん!!

しばらく泣いていた。泣いて、涙がでなくなった。そのあと、またしばらくしてから、川の音が聞こえてきた。

ざああ、さあああ。命を育む水の流れ。

命。いのち。

あの三錠はこの音の中で流れ流され、いのちの世界へと行きつくのだ。広がってきれいな世界。

私は？

どこかへ、行ける？

釣りのおじいさんが私を見ていた。とりあえず、川上に向かって

走っていきよじった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9167a/>

---

食後に三錠、おみずでどうぞ。

2010年10月8日15時18分発行